

「命」とは

西脇市立西脇東中学校一年 永尾昊幸

「命とは何？」と聞かれたら、どう答えますか。「自分の一生」・「親からさずかった命」など出てくるでしょう。

僕が考える命とは、「与えられた試練」だと思います。なぜかという、人生には、いく度となく、大きな壁を目の前にすると思います。そこであきらめる人、そこからはいあがる人、又は足ふみする人、その壁を簡単に乗り越える人、いろいろな人があると思います。あきらめる人は、そこからの生活、人生がダメになっていきます。よくあるのが、その壁を前にして、あきらめてしまい、気持ちが暗くなり、本当はやってはいけないことをする人があります。そんな人の気持ちは、今の僕には分かりません。

僕には、友達、家族、先生、野球でお世話になった監督・コーチと、多くの人達が僕のまわりにはいます。その人達にとっても、僕の命は大切なものです。そうであると思っています。それ以上に僕の命は、僕の大切なものです。

「与えられた命」は「そだてる命」でもあり「守る命」でもあると思います。

「守る命」僕の父は、僕が生まれて、生後四ヶ月で、脾臓破裂の突然死で、命を失ってしまいました。

僕が、生まれた日、花火まであげて、喜こんでいたそうです。

「ありがとう、生まれてきてくれて

昊幸、とうさんは、うれしいぞー」

といって、大きな声でさけんらしいです。

でも、その四ヶ月後突然、あっけなく、僕と母の前からいなくなってしまったのです。

赤ちゃんの僕は、まだしも、母は、前髪が抜け落ちるくらい泣いたらしいです。

でも、祖父、祖母と、まわりの人にささえられて、僕の命、父にもらった命を、守って母も命をつないでいます。大切な命です。

その時に、母には、「そだてる命」があり「与えられた命」「守る命」があったから生きてこれた。母は僕に「守る命」の大切さを教えてくれています。

一昨年、九十三才の曾祖父が、車まで歩いて行き、手伝っていた、僕の祖母（娘）の腕の中で、心肺停止になり他界、その一年後に後を追うように、曾祖母が他界と、僕を大事にしてくれた人達が、父の所へと旅立って行きました。

「ありがとう。ありがとう。」と、感謝して、見送りました。

曾祖母が旅立って、五日後に、母の妹、おばさんに、男の子が生まれました。

「いらっしやい。初めまして。まってましたよ。」とあたたかく迎えました。

「消えて行く命」「新しく芽生え、育っていく命」

僕が生まれてから、十三年間で命のとうとさを、いろいろなことで、教えてもらったと

思います。

今の自分と同じ年代の人達が、いじめなどに合い、おいつめられて、自殺してしまう人の気持ちには僕には分かりませんが、ただ分かることは、自分がそういうことを人に、絶対にしてはいけない！ということは自分は理解しています。

この作文を書くのに、母や祖父母と「命」についていろいろな話をすることができませんでした。今まで知らなかった、父のことについてもたくさん知ることができて、僕はすごくうれしかったです。

「人の命」というのは、とても奥が深くて難しいことなんだと改めて思いました。生きるということは、ドキドキしたり、ワクワクしたり、悲しかったり、寂しかったりします。それを、「与えられた試練」とし大切にし、守らなければならない命を守ります。

これからも、僕の命は、僕だけのものではない。ということを、自分に言い聞かせながら、大人に成長していきたいと 생각합니다。